

若いぼくらの修学旅行

愛知淑徳学園理事長・学園長

小林素文

今から百十三年前の明治四十二年三月、愛知淑徳の記念すべき第一回卒業式が挙行される五日前、本校最初の修学旅行が行われました。

明治の時代、女学校が生徒の宿泊旅行を行うことは世間の目が厳しく、愛知淑徳第一回生の「卒業記念に京都へ宿泊旅行がしたい」との申し出はかきませんでした。あきらめきれない生徒たちは校内に京都の名所をつくり、模擬店を出したり演技大会を行ったりしました。

こうした淑徳生の熱意が伝わると、創立者小林清作校長が「宿泊旅行に間違いをおかす教育はしていない」と父兄を説得し、愛知県下最初となる高等女学校の宿泊旅行が始まったのです。

「卒業お礼参り」と称した伊勢神宮への一泊二日だけの修学旅行でしたが、卒業後は二、三年花嫁

修業をし、結婚し婚家に尽していく者がほとんどであった明治の時代、卒業を控えての友との宿泊旅行は達成感と解放感に満ち満ちていたことでしょう。

その後恒例行事となった伊勢方面への一泊二日の修学旅行は、大正五年から東京・鎌倉・江の島への三泊四日となり、大正一二年からは日光が加わった五泊六日が定着しました。

宿泊先は旅館で畳が当たり前の時代、中禅寺湖畔のレイクサイドホテル(現在のリッツカールトン日光)のベッドに宿泊することは大きな魅力でした。

昭和二年日華事変、昭和一三年国民総動員法と暗雲が漂い始めます。

昭和一五年、文部省から修学旅行の規模や目的を制限する通達

がなされると、愛知淑徳は「紀元二千六百年を祝賀するための檀原神宮、吉野神宮参拝」を目的とし、関西方面への三泊四日と規模を縮小しましたが、参拝は一日だけですませ、あとは奈良、京都見学にあて、これまでのやりかたを踏襲しようとした。

昭和一六年、「宮城外苑整備勤労奉仕」を目的として、再び東京方面への四泊五日の修学旅行としました。主目的の勤労奉仕は実質的に二時間余りで、他の日程は従来とほとんど変わらず、人気のレイクサイドホテルにも宿泊しています。

昭和一七年四月一日、突然名古屋上空に現れた米軍爆撃機による三菱大江工場などへの爆弾投下により、学校行事が次々と廃止される中でも、淑徳は「戦勝祈願」を目的とし、伊勢、吉野、大津と二泊三日の修学旅行をおこないました。

その後の昭和一八年から昭和二二年までは修学旅行どころではない戦争と戦後の混乱期でした。

昭和三年、五年ぶりに修学旅行が再開します。食糧難のおり生徒各自が米を持参し、京都に一泊するだけの小規模なものでしたが、戦後の解放感と希望に満ち満ちていたことでしょう。

昭和三八年、舟木一夫が歌う『修学旅行』が流行っていた時代に修学旅行に行き、バスで皆と歌ったことが六〇年近くたった今も懐かしく思いだされます。

二度とかえらぬ思い出乗せて
クラス友達肩よせあえば
ベルが鳴る鳴るプラットホーム
ラララ……
汽車はゆく汽車はゆく
はるばるとはるばると
若いぼくらの修学旅行



「サトウキビを採ってこれから黒糖にします!」
こうしたいつもの修学旅行にもどれますように

修学旅行はいつの時代も生徒の楽しみであり、それぞれの時代の思いをのせて行われてきました。しかし、昨年度と本年度、中学生の沖縄への修学旅行は実現しませんでした。コロナが終息し、生徒たちが肩寄せ合い伸び伸びと学び楽しむ修学旅行に戻れることを心より祈りたいと存じます。